

初期ラーソー文学の由来について

山 畑 倫 志

1. はじめに

現在のラージャスターン州やグジャラート州を中心とするインド西部地域は 12 世紀ごろから地方語による文学を発展させていた。そのなかでも「ラーソー (rāsa, rāso, rāsaka)」と呼ばれる文学スタイルが盛んに採用された。特にラージプートの王族など実在の人物の戦記や恋愛物語を主題にしたものが 14-15 世紀以降増加し、『プリトヴィーラージ・ラーソー (*Prthvirāj-rāso*)』などが代表的な作品となる。

この「ラーソー」と名付けられる作品が現れるのは 12 世紀ごろからであるが、その時期は中期インド語のアパブランシャ語文学について文法、修辞、韻律、語彙などの面で包括的な著作を残すグジャラートのジャイナ教徒 Hemacandra の活動時期と同時期である。アパブランシャ語は早ければ 6 世紀ごろ¹⁾ からすでに文学のための言語として見なされてきた跡がみられ、9 世紀には Svayambhū や Puṣpadanta の各著作を代表とするジャイナ教の教義に基づく叙事詩や行伝説話が数多く作られている。Hemacandra がアパブランシャ語文法を著した 12 世紀にはアパブランシャ語の文学使用については相当程度の蓄積があったと考えられる。だが同時にこの時期はラーソーという比較的新しい形式が用いられ、そしてより近代語に近い言語での文学活動が盛んになりだした時期でもある。そのためアパブランシャ語を用いたジャイナ教文学とラージャスターン語、グジャラート語文学との間には直接的な関係があると推定できる。

本論考の目的はラーソーの中でも最初期の作品を見てラーソー文学の成立においてアパブランシャ語のジャイナ教説話がどのような影響を与えたかを明らかにすることである。

2. 行伝スタイルとジャイナ教

ジャイナ教の行伝説話は *Kalpasūtra* といった初期の祖師伝から始まり、二十四

祖師，転輪聖王や他の偉人を含むようになり六十三偉人（*Triṣaṣṭiśālākāpuruṣa*）が行伝で取り上げられる対象となっていく。Puṣpadanta の *Mahāpurāṇa* や Hemacandra の *Triṣaṣṭiśālākāpuruṣacarita* などではそれらすべてを取り上げる典型的な行伝説話であるが，Rāma や Lakṣmaṇa, Rāvaṇa, Kṛṣṇa が偉人の中に含まれているため，Svayambhū の *Paumacariu* や *Ritṭhanemicariu* のようにラーマ説話やクリシュナ説話をジャイナ教説話に取り込んだ作品も見られる。特にアパブランシャ語が頻繁に使用されるようになってからは行伝説話は形式的にも洗練され，sandhibandha という型を用いるようになり，ジャイナ教徒によるアパブランシャ語作品の中心となる。12世紀の Hemacandra がまとめたアパブランシャ語の文法や韻律も基本的にはこれらの行伝説話をもとに作成されている。

3. ラーソーについて

ラーソーは Svayambhū²⁾ も言及しており，現存する作品よりもかなり以前から似たような作品は作られていたと考えられる。Svayambhū はアパブランシャ語行伝説話で主流の形式であった sandhibandha に対して rāsābandha という形式を対置しているが，sandhibandha が形式上の規定が多く³⁾，比較的定型的なスタイルであるのに対して，rāsābandha は韻律の規定のみである。その韻律の規定も実際のラーソーではあまり従われていない。Hemacandra の記述に従えば，むしろ歌謡や舞踏とともに語られる形式一般のことを指していたとも思われる⁴⁾。

4. 初期のラーソー文学

冒頭で述べたようにラーソーは主にラージプートの王侯の活躍を主題とし，戦争と恋愛の描写が好まれる。Hemacandra による文法書 *Śabdo 'nuśāsana* には多くの引用が用いられているが，描写や固有名詞から実在の王をテーマとした作品から引いたと思われる箇所がある。[Pischel 1902: 41–42] [Jacobi 1918: 77] [Alsdorf 1937: 71]

rakkhai sā visahāriṇī te kara cumbivi jīu /
paḍibimbiamuñjālu jalu jehim aḍohiu piu // 439.3
bāha vichodavi jāhi tuhum haum tevai ko dosu /
hiaatṭhiu jai ṇisarahi jāṇaum Muñja su rosu // 439.4

その水汲女は自らの両手に口づけして命を長らえている。ムンジャの映り込む水に（水汲女はその顔を）沈めることなく，その手で水を飲んだ。「私の腕をふりほどいてあなたは行ってしまい，私も同じように（あなたから離れる）。それになんの問題があるでしょ

(226)

初期ラーソー文学の由来について (山 畑)

う。ただもし（私の）心から出て行ってしまうのなら、ムンジャよ、私も怒りというものを知るでしょう」

ここに現れるムンジャは明らかに人名であるが、実際に存在したマールワールの王ムンジャ（10世紀）⁵⁾だとすれば、この引用部は英雄伝記としてのラーソーに近い作品に由来するものと思われる。

ただ現存するラーソー文学はジャイナ教徒の手になるものがほとんどであり、その内容もアパブランシャ語文学を踏襲している。後述する Śālibhadra の *Bhara-teśvarabāhubalirāsa* (1184) はまた現存するラーソーとしては最初期のものとなるが、初代の転輪聖王 Bharata とその兄弟 Bāhubalin の諍いとその顛末を描いており、それまでの行伝説話と同種のテーマを扱っている。Svayambhū の記述やムンジャ王の物語から推測して、Śālibhadra よりかなり以前からジャイナ教説話の伝統とは別にラーソーの伝統があったとすれば、その形式に自らの説話作品を乗せていったのがジャイナ教徒であるとも考えられる。

5. Jinadatta と *Upadeśarasāyanarāsa*

Jinadatta（12世紀）は上記の Hemaçandra や *Nemināhacariya* の作者 Haribhadra、および Śālibhadra と同時期である。そしてグジャラート地方を活動の中心としていたことも一致している。Jinadatta は『チャルチャリー (*Carcari*)』、『ウパデーシャ・ラサーヤナ・ラーサ (*Upadeśarasāyanarāsa*)』、『カーラ・スヴァルーパ・クラカ (*Kālasvarūpakulaka*)』の3つの作品を残しており、それらはすべてアパブランシャ語で書かれている。そのうち『ウパデーシャ・ラサーヤナ・ラーサ』はジャイナ教徒によるラーソーでは現存する最古のものである。

冒頭部には以下の序言が添えられている。

carcarirāsakaprahye prabandhe prākṛte kila /
vṛttipravṛttiṃ nādhate prāyaḥ ko 'pi vicakṣaṇaḥ // 1
kintu kvacit kvacit kiñcid upadeśarasāyane /
padaṃ durbodham ity eṣa nyāyo vyākhyāparīśramah // 2
atra paddhaṭikābandhe mātṛāḥ śodaśa pādagāḥ /
ayaṃ sarveṣu rāgeṣu gīyate gītikovidaiḥ // 3

チャルチャリーやラーサカの形をとったプラークリット語の作品に学識のある方々の多くは注釈をつけたりはしない。

しかし『ウパデーシャ・ラサーヤナ・ラーサ』の中ではところどころに理解しがたい部分を説明する労をとった。

ここではパッドティカー律に基づいて 16 マートラの詩句を作る。

それが歌謡に長けた人々によってあらゆるラーガで歌われるように。
その言葉通り、作品は 16 マートルでそろえられている。

paṇamaha pāsavīrajaṇa bhāviṇa
tumhi savvi jiva muccahu pāviṇa /
gharavavahāri ma laggā acchaha
khaṇi khaṇi āu galaṃtau picchaha // 1
パールシュヴァとジナに本心から敬礼せよ。
汝らあらゆる生命は罪から解放されるはずである。
家庭での行いに執着してはならない。
常に墮落することのないよう生き方に注意せよ。

これは Svayambhū の規則の一部にかなっており、また脚韻も適用され、形式が整っている。

6. Śālibhadra と *Bharateśvarabāhubalirāsa*

先にも述べた『バラテーシュヴァラ・バーフバリ・ラーサ』はグジャラート語の最初期に位置する文献として重要であり、また上の『ウパデーシャ・ラサーヤナ・ラーサ』とともにラーソーの名を有するごく初期の作品である。本作はジャイナ教伝説上の偉人を取りあげた典型的なジャイナ教説話であるが、アパブランシャ語行伝説話に多く見られるようなカダヴァカとサンディで構成された長大なものではなく、全体で 203 詩節にとどまり、簡潔な構成である。

huṃ hitakaraṇi kaḥuṃ sujāṇa, kūṭuṃ kaḥuṃ tu bharaḥesara āṇa / 97
スジャーナよ、私は（おまえの）ために言っているのだ。間違ったことを言ったとしてもそれはバラテーシュヴァラの指示なのだ。

このような作品はそれまでのジャイナ教説話作品には見られず、新たなスタイルであるラーソーに従来のジャイナ教説話のテーマを乗せた作品であると考えられる。

7. 結論

以上、初期のラーソー文学はジャイナ教徒が主体となって作成されており、その内容も後の英雄伝記よりもジャイナ教のアパブランシャ語説話により近いことがわかる。ジャイナ教との関係が薄い『ハンミール・ラーソー (*Hammirrāso*)』などの作品が現れてくるのは 13 世紀に入ってからであり、従来は歌謡の伝統の中で用いられてきたラーソーが文字として残される作品になる過程で、ジャイナ教

(228)

初期ラーソー文学の由来について (山 畑)

徒が説話のためにラーソーを採用したことは重要なことと考えられる。

1) Kālidāsa の *Vikramorvaśīya* に見られるアパブランシャ語部分が後代の付加で無い場合。

2) その韻律書 *Svayambhūchandas* において

ghattāchaḍḍaṇīāhiṃ paddhaḍḍīāhiṃ suaṇṇarūehiṃ

rāsābaṃdho kavve jaṇamaṇaahirāmao hoi // 8.24

ガッター律, チャッダニカー律, パッダディカー律および他の素晴らしい韻律からなるラーサーバンダは美文詩のなかでも人々を喜ばせるものである

ekkaṇṇisaṃattāṇiṇaṇau uddāmagiru, caudasāi vissāma hobhai gaṇaviraithiru /

rāsābaṃdhu samiddhu eu ahirāmaaru, lahuatīalaavasāṇavirai aimahuraaru // 8.25

21 マートルで終わり, 声を落とす。14 マートルでの休止が確実なガナの終わりである。素晴らしいラーサーバンダはこれで完成する。(各行を) 3つの短音節で終わらせればより美しい

3) 全体を内容上の区切りから sandhi に分け, それぞれの sandhi を細かな kaḍavaka に分けるものである。各 kaḍavaka はおおむね 10 ~ 20 詩節からなり, その構造は起部に当たる 1 詩節 (duvai 律などがあてられる), 内容部にあたる部分, そして結部にあたる ghattā である。内容部の韻律は統一されており, それが kaḍavaka を一つのまとまりとしている。それぞれ異なる韻律が採用される。起部と結部はそれぞれ二行詩から四行詩であり, 内容部は可変であるが, おおむね 10 から 20 行からなる。そのため一つの kaḍavaka はそれほど長くなることはない。

4) Hemacandra は詩論 *Kāvyānuśāsana* の 8.4 において歌謡 (geya) の一つとして rāsaka を挙げ, その注釈では次のように述べられている。

anekanartakiyojyaṃ citratālalayānvitam /

ā catuḥṣaṣṭiyugalād rāsakaṃ masṛṇoddhatam //

多くの舞踊と結びつき, さまざまな拍やテンポが添えられる。

64 の 2 拍子を用い, 柔らかな動きから激しい動きへ変わるものをラーサカという

5) Vākpati II Mālwā を中心とした Paramāra 朝の王。Śṛṅgāraprakāśa を著した Bhoja 王の 2 代前の王。[Yadava 1982: 37-39]

〈参考文献〉

Alsdorf, Ludwig. 1937. "Apabhraṃśa-Studien." *Abhandlungen Für Die Kunde Des Morgenlandes* (November 5): 1-117.

Gandhi, Lalchandra Bhagawandas. 1927. *Three Apabhraṃśa works of Jinadattasūri*. Baroda: Oriental Institute.

Jacobi, Hermann. 1918. *Bhavisatta Kaha Von Dhaṇavāla: Eine Jaina Legende in Apabhraṃśa*. München: Verlag der Königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften.

Jain, Devendr Kumar. 1983. *Apabhraṃś aur Hindī*. Jaipur: Rājasthān prākṛt bhārati samsthān.

Prabhākara, Manohara. 1976. *A Critical Study of Rajasthani Literature, with Exclusive Reference*

to the Contribution of Cāraṇas. Jaipur: Panchsheel Prakushan.

Tanak, Satish. 2009. *Bharateśvara Bāhubalirāsa*. Ahmedabad: Adarsh Prakashan.

Tessitori, Luigi Pio. 1917. *A Descriptive Catalogue of Bardic and Historical Manuscripts*. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

Vyas, Kantilal Baldevram. 1982. *Apabhraṃśa of Hemacandra*. Ahmedabad: Prakrit Text Society.

Yadava, Ganga Prasad. 1982. *Dhanapāla and His Times: A Socio-cultural Study Based Upon His Works*. New Delhi: Concept Publishing Company.

〈キーワード〉 インド文学, ジャイナ教, 行伝説話, ラーソー, アパブランシャ語, グジャラート語

(北海道大学大学院文学研究科専門研究員, 博士(文学))

新刊紹介

前田 専學・中村 元 監修 浪花 宣明 著

『原始仏典 第2巻 相应部經典 第2巻』

A5版・630頁・本体価格8,000円
春秋社・2012年5月